

## 南画展 後期がはじまりました！（5月20日～6月8日）

5月20日(火)より展覧会の後期が始まりました。およそ60点の作品が入れ替わりますので、前期にご覧になった方もまた新しい作品と出会えることと思います。

ここで後期の見どころについて少しご紹介します。

村上華岳<sup>かがく</sup>《寒山水涸図》1927年頃 メナード美術館蔵（作品番号148）-----

- ・・・六甲山を多く描いた華岳、この作品では近い視点から涸れた滝が描かれ、墨のかすれとぼかしを大胆に生かし、山肌の起伏が大胆かつ繊細に表現された名品です。  
この頃京都から芦屋へ移り、静寂の中で山と仏を好んで描いています。



岡田米山人<sup>べいさんじん</sup>《幽客煎茶図》1818年 大阪歴史博物館蔵（作品番号14）-----

- ・・・米山人75歳の作品。勢いのある筆づかいで山水が描かれた作品です。風景の中にはお茶を楽しむ人々が小さく描かれ、文人達があこがれた境地が描かれています。米山人のダイナミックな表現に注目です。  
米山人は、若い頃播磨の剣坂村（現加西市）で勉学に励んでいます。



青木木米<sup>もくべい</sup>《溪山幽居図》出光美術館蔵（作品番号26）-----

- ・・・木米の山水画の魅力はなんといっても色彩の豊かさにあるでしょう。陶工としても活躍した木米は陶器の絵付けをするなかで会得した色づかいを存分に絵画にも生かしています。



山本梅逸<sup>ばいいつ</sup>《嵐山春景図》愛知県美術館（木村定三コレクション）（作品番号35）

- ・・・桜の咲き誇る京都、嵐山の景観が柔らかく繊細な筆致で描かれた作品。私たちのよく知っている景色を描いたこのような作品を目にすると、画家やその時代がより身近に感じられるのではないのでしょうか。



小川芋銭<sup>うせん</sup>《水村童子》1933年頃 茨城県近代美術館蔵（作品番号73）-----

- ・・・橋の上から童子たちが釣りをしているのどかな情景が描かれた作品です。小川芋銭は茨城県牛久沼に住み、水辺の情景を得意としました。自然と人間が親和した詩情豊かな世界が描かれています。



富田溪仙<sup>けいせん</sup>《宇治川之巻 木幡》1915年 滋賀県立近代美術館蔵（作品番号78）

- ・・・前期に引き続き、後期では画卷の後半部分をご覧ください。  
宇治川沿いの風景がどのように展開してゆくのでしょうか、じっくりご覧下さい。

牛田雞邨<sup>けいそん</sup>《山湖》大正後期 星野画廊蔵（作品番号111）-----

- ・・・横浜に生まれ、今村紫紅、速水御舟らとともに活躍した画家、牛田雞邨。この作品では山と湖がテーマとなっていますが、その大胆で斬新な構図に驚かされます。墨と余白のコントラストを大胆に生かし、非常にモダンな感覚がうかがわれる作品です。

森田恒友<sup>つねとも</sup>《風景》1925年 茨城県近代美術館（作品番号170）-----

- ・・・前期では《新柳水禽》（作品番号171）という爽やかな日本画を紹介しましたが、後期では《風景》と題する油彩画と《朝の村道》（作品番号172）という日本画の2点を展示します。森田恒友はフランスからの帰国後、洋画と日本画の両方を描きました。柔らかい筆づかいと丸みを帯びた輪郭線からなるこの作品にも、「日本の山河を見直し、日本の昔の美術を見直し」そうとする森田の姿勢があらわれているのでしょうか。

